

移住に至るまでのプロセスと移住後の実態

—高知県四万十町十和を対象として—

1140463 濱田 将

高知工科大学マネジメント学部

1. はじめに

1-1. 背景

近年、日本では過疎地域市町村が増加しており、深刻な社会問題として注目されている。過疎データバンクによれば、2012年の日本の過疎地域市町村は581市町村であり、これは過疎法一部改正によるものも含まれるが、平成の大合併が終息した2006年の過疎地域市町村の513市町村よりも増加している。

過疎地域とは地域内の若者が減少し、高齢者の比重が大きくなることであり、過疎法の過疎地域要件の人口要件の一部として、昭和35年から平成17年までの45年間の人口減少率が28%以上で、平成17年の高齢者比率が29%以上、もしくは若年者比率が14%以下の地域と定義されている。

過疎地域の問題点として、①若者が減少することにより地域の産業が廃れていくおそれがあるということ、②若者が減少し、都市部へ流出した場合、自治体の税収が減少すること、③税収減少および高齢者の増加により、福祉施設、支援の充実の限界を迎え高齢者の生活に困難をきたすことの3点が挙げられる。地域の産業が廃れることになれば、若者の働き口がなくなり、職を求め都市部へ流出することで、さらに若者減少の一途をたどるおそれが考えられる。また、税収が減少すれば、自治体の財政破たんにつながり、福祉施設の不足や十分な福祉支援が望めなければ、高齢者が満足した生活を送れないおそれがある。過疎化が進行すると、過疎地域市町村は負の連鎖に陥り、いずれは地域としての限界を迎えるおそれがあるため、過疎地域市町村にとっては過疎化に歯止めをかける必要性がでてくる。

井口ら(1995)によると、中山間地域への移住の需要は、仕事面などで自分の希望する条件が整えば移住するなどの条件付き移住希望者が多いとわかっている。対して、小森聡(2008)によると、移住受入側の意識は、移住者があった集落のほぼ半数が「新しい人が来て集落に活気が出た」と回答していることや、「条件によっては受け入れても良い」と回答した集落

の約7割が「集落の伝統を守り、行事に参加してもらえる人なら歓迎する」と答えているなど、移住者に対して歓迎する感情を持っている人が多いことがわかった。また、空閑睦子(2008)によると、国や各自治体では、全国的な過疎化の状況を受け、過疎化対策として独自の移住政策等を行い、人口増加の試みを行っている。例えば、総務省等が行ったリゾート法、長野県飯山市がお試し滞在などを行う「飯山市ふるさと回帰支援センター」や岩手県遠野市が市民と一体になって定住促進を行う「で・くらす遠野」などがある。しかし、このように様々な取り組みを行っているものの、過疎データバンクによると、平成22年で581過疎地域市町村あるうち、平成17年から平成22年の5年間で人口が増えた過疎地域市町村は9市町村のみと、成果が上げられずにいる地域がほとんどである。また、実際に過疎地域に移住しても、地域住民との交流や習慣になじめず、3年以内に都市部に戻る事例も多く、移住政策及びその運用において様々な課題が議論されている。

その中で、過疎地域と定められている高知県の四万十町は、人口こそ減少しているものの、転入者自体は近年増加傾向にある。県内の他のほとんどの市町村は減少傾向もしくは変化があまり見られない。四万十町の転入者が増加傾向にある背景として、県内他市町村と比較してみると民間と行政の両方の移住政策が充実していることがある。特に、民間の移住促進団体を通しての移住が多い。よって、過疎地域であり中山間地域という生活する上で不便な状況の中でも都市ではなく中山間地域に移住してきた心理的な要因は何か、中山間地域において定住していくための生活実態はどのようなものであるかなど、高知県四万十町の事例を調査分析することは、四万十町の移住政策の中身のさらなる充実につなげていくことができると考えられる。

この視点から、既往研究を見てみると、移住者の単純な移住理由、移住後の仕事や暮らしなどは明らかになっているが、様々な要因を加味した移住プロセスや定住していくための生

活の実態に関する研究は未だ主要論文の中からは見あたらない。

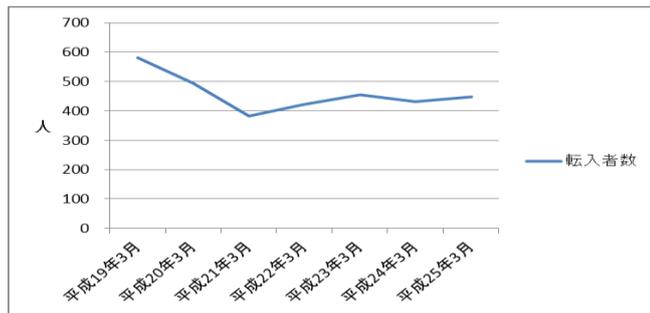


図 1-1 四万十町の転入者数推移

1-2. 目的

本研究の目的は、高知県の四万十町のなかでも十和地区を対象として、①中山間地域への移住に至るまでの意思決定プロセスを明らかにするとともに、②移住前と移住後での変化や満足度などの生活実態を明らかにする。

1-3. 研究方法

本研究は、はじめに既往文献の調査をすることで、移住に関する現状や課題を整理した。次に、調査する質問内容をまとめ、同時に四万十町における移住の現状と課題を把握した。さらに、四万十町十和でヒアリング調査を行い、その結果を分析した。最後に、まとめとして移住意思決定プロセスと移住後に定住していくための生活の実態について明らかにしていく。

2. 四万十町十和の概要

2-1 四万十町十和の特性

四万十町は、平成 18 年 3 月 20 日に窪川町、大正町、十和村の 2 町 1 村が合併して誕生した新町である。高知県西部に位置し、東から西に流れる四万十川の中流域にあり、東南部は土佐湾に面している。面積は 642.09 k m²であり、四国で 3 番目に広い町である。平成 22 年度の国勢調査より、人口は 18,733 人である。過疎地域市町村にも定められている。そのなかで、十和地区について紹介していきたいと思う。

① 自然（気候風土）

◎四万十町の西部に位置する。

◎村の中心部を東から西に、日本最後の清流といわれる「四万十川」が蛇行して流れている流域でもある。

◎四万十川流域沿いに農地が点在している。

◎面積 642.09 k m²の約 9 割を林野面積が締めている。

②社会基盤

◎人口区分

平成 22 年度の国勢調査調べの四万十町人口 18,733 人の内、15 歳未満が 11%、15 歳から 64 歳までが 51%、65 歳以上が 38%である。15 歳以上人口 16,679 人の内、労働力人口は 9,725 人であり、そのうちの就業者が 9,207 人である。また、非労働力人口は 6,733 人であり、町内 15 歳以上人口のおよそ 4 割である。

◎道路・交通

十和地区の幹線道路として東西に走る国道 381 号がある。一番近く的高速道路である四万十町中央 IC までは車で約 1 時間かかる。公共交通機関は、JR 予土線の十川駅があり、高知市まで約 2 時間かかる。

③経済社会

四万十町の産業就業者比率が大きいのは、第三次産業であり、およそ半数を占める。次に大きいのが第一次産業で約 30%を占めている。平成 22 年度の町内の経済生産額は 497 億 9,700 万円であり、産業別の割合は、第一次産業が 12%、第二次産業が 18%、第三次産業が 70%であり、第三次産業がウエイトを占めている。第一次産業では、生姜、米、茶、栗、椎茸などの農林業が多く、第二次産業では建設、製造業が多く、第三次産業ではサービス業が最も多く、次いで不動産業、卸売・小売業が多くを占めている。

四万十町内にある事業所は 1,007 事業所あり、従業員総数は 6,041 人である。事業所の数は卸売・小売業が 338 と一番多く、次いで宿泊業・飲食サービス業が 152 となっている。従業員数でも卸売・小売業が最も多く 1,415 人であり、次いで医療・福祉の 953 人が多い。町内の主なお店は道の駅である。四万十町内に 3 つあり、十和地区には「道の駅とおわ」がある。

④その他

四万十川に代表される豊かな自然環境、高知県西部の玄関口として利便性の高い立地条件、豊富な農林水産物や食材全国に誇れる観光資源、町外の方を受け入れる住民気質や取組、施設などが評価され平成 24 年度の地域ブランド調査において四国の中で一番になった。

2-2 四万十町十和の移住の現状

四万十町は、行政と民間ともに移住政策が県内他市町村と

比べると充実している。特に十和地区にある民間の「いなかパイプ」という団体が四万十町の移住に大きく貢献している。主な施策としては、いなかインターンシップの開催やいなか求人を行っている。特にいなかインターンシップの場合は、1カ月など短期的に四万十町へ住みながら行うため、移住前に土地の魅力や現状を実際に肌で感じとることができる。それにより、平成21年から平成25年まで転入者が増加傾向にある。このように、四万十町の移住政策は高知でもトップレベルであり、四万十町への移住を考える者にとって移住への不安が少ないものとなっている。四万十町役場といなかパイプの主な施策として、以下に整理した。

2-2-1 四万十町役場

(1)空き家バンク

移住者が暮らすための空き家を貸す制度である。町内にある空き家を広報誌で募るなど様々な手法で調査し、賃借、売買可物件を詳細に絞り出している。年間およそ100件の問い合わせがあり、電話などで人間性を客観的に判断し、その後見学や大家との打ち合わせを行うなどして、空き家を貸している。役場の空き家バンクに関するホームページの開設後約2年間での移住実績は23組48人である。

(2)お試し滞在施設

移住者が事前に四万十町の生活を肌で感じとるための施設である。お試し滞在住宅と滞在型市民農園の2つがある。お試し滞在住宅は、旧教職員住宅を改修し、将来的に四万十町へ移住を考えている人や周辺の地域住民と交流が持てる人に対して、1カ月単位で最長3カ月空き家を貸す施設である。平成25年8月時点で、9組15名が利用しており、そのうち3組3名が移住に結びついている。また、予想以上に、周辺住民が入居者をお世話してくれるなど、地域の交流の拠点にもなっている。

滞在型市民農園には、滞在型農園(宿泊施設付き貸し農園)と日帰り型農園(貸し農園)の2つがある。滞在型農園(宿泊施設付き貸し農園)は、年間36万円から42万円を支払うことで、1年単位で最長3年借りることができる。現在、22区画中22区画すべてが貸し出されている。日帰り型農園(貸し農園)は、年間12,000円支払うことで、1年単位で最長3年借りることができる。現在、16区画中15区画が貸し出されている。

(3)その他

①行政支援(補助金等)の紹介

四万十町役場の移住者支援用ページに、移住してきた場合に受けられる補助金等の行政支援を紹介している。現在、移住者のためだけにある支援は、四万十町にU・Iターンを希望している者が居住する住宅の改修補助金とケーブルネットワーク加入金等補助金の2つである。

また、移住者支援用ページでは他の行政支援の一覧も紹介している。これは、移住者用だけというよりは、保育、教育、就労など四万十町の住民なら誰でも受けることができるというものである。

②移住者との懇談会等の開催

四万十町は大阪、東京などの都市部で開催される移住相談会に積極的に参加している。この相談会をきっかけに移住をする者もいる。また、四万十町に移住してきた者たちと役場が一体となって、移住者の交流の場づくりや、移住者と地域住民との意見交換会、さらなる移住促進に向けた懇談会なども行っている。

③移住体感ツアー

四万十町への移住を希望する者たち10名ほどを対象に1泊2日で生活に必要な施設まわりや先輩移住者を交えた懇親会などを行っている。これは、四万十町役場のホームページや四万十町出身者など約1,800名に直接通知し、参加を募った。

2-2-2 いなかパイプ

いなかパイプは、四万十町十和地区に拠点を置き、高知・静岡・愛媛生まれのUIターンしたスタッフが四万十川流域に暮らしながら、いなかと都会をつなげる事業開発と人材育成に取り組んでいる。海・山・川の一次産業の再生に向けて、農家や漁師たちとインターンシップ事業や起業家育成の事業に取り組んでおり、商品開発や観光開発に関わるワークショップの企画運営を行っている。

(1)いなかインターンシップ

これは、「いなかビジネス教えちゃる!インターンシップ」という名で、四万十町を中心に高知の農山漁村に29泊30日で住み込み、現場実践型研修プログラムを行っている。内容は、農業者・漁業者・商業者・観光事業者・デザイナーなどの下で「いなかビジネス」の手伝いをするすることで、自分自身

と向き合い、自分は何がやりたいのか、自分に何ができるのかを発見するために行っている。さらに、地域に暮らす人々との出会いが「つながり」「人間関係」というものをリアルに感じさせ、田舎暮らしをしていけるのかを考える機会を与えている。例えば、四万十町十和地区にある「道の駅とおわ」で市場・食堂・ファーストフードの業務補助や、売上げアップ方策や課題解決に向けた取り組みを検討・提案し実践するなどの研修がある。

(2)いなか求人

いなか求人は、いなかパイプホームページ上で「いなかで働きたい人」と「いなかに入財がほしい人」をつなぐための情報発信・共有を行っている。この求人は、正職員・契約職員・パート・期間限定アルバイト・ボランティアなど「いなか」にある求人ニーズを聴き取りながら、情報を掲載し、試験的な運用からスタートしていている。例えば、高知への旅行者を迎えるゲストハウスのヘルパーがある。基本的に住み込みで、1カ月単位で働く短期型と期限のない長期型があり、書類審査と面接で採用活動を行っている。

(3)その他

①いなかマガジン

いなかパイプのホームページ上で、高知の田舎に移住して暮らしている人たちが不定期で、日々の暮らしを日記風に紹介している。

②いなかファン

いなかパイプのメールマガジン、ツイッター、フェイスブックで、いなかインターンシップやいなか求人などのいなかパイプが発信する高知県の田舎に関する情報を得ることができる。

2-2-3 移住政策の必要性

移住政策は移住を希望する者たちにとって、その土地の情報収集や移住後の暮らしをサポートしていくための重要な政策である。そのため、移住政策があることによって、受け入れ側が移住促進を行えるというメリットがあるだけでなく、移住者側にも移住しやすくなるようなメリットが存在しているのである。

3. 若者の中山間地域への移住実態調査の概要

3-1 若者の中山間地域への移住実態調査の目的

四万十町は町の移住政策の充実により多様な移住者がいる

ことが想定できる。そこで、移住者に直接ヒアリングすることで、移住者の移住意思決定プロセスと移住後の生活実態を明らかにした。

ヒアリング調査では、現在、過疎化が進行している中山間地域において、移住者の方々がどんな意思決定を経て移住を決意したのか、移住後の日々の生活実態について、聞き取り調査した。

次に、ヒアリングの結果から、「就職・起業」、「結婚・同居」、「余暇活動・人生を見つめ直す」という3つのカテゴリーに分けることで、その違いがみられるかどうかを確かめた。

3-2 若者の中山間地域への移住実態調査の対象

町内十和地区に居住する移住者10名を対象に調査した。調査対象者は基本的にいなかパイプを通してきた移住者を紹介してもらった。そこで、「就職・起業」、「結婚・同居」、「余暇活動・人生を見つめ直す」という3つのパターンに分類した。

結果として、「就職・起業」は4人、「結婚・同居」は3人、「余暇活動・人生を見つめ直す」は3人となり、調査をした。年齢層は20代が4人、30代が5人、40代が1人と全て生産年齢の人たちである。

・就職・起業

世帯	氏名	年齢	性別	居住期間	職業
一人世帯	Aさん	34歳	女	約3年	自営
夫婦世帯	Bさん	40歳	男	約3年	自営
夫婦世帯	Cさん	27歳	男	約3年	団体職員
一人世帯	Dさん	33歳	男	約半年	団体職員

・結婚・同居

世帯	氏名	年齢	性別	居住期間	職業
夫婦+親+祖父母世帯	Eさん	24歳	女	約1年半	専業主婦
夫婦世帯	Fさん	36歳	女	約10カ月	専業主婦
夫婦世帯	Gさん	26歳	女	約3年	主婦+アルバイト等

・余暇活動・人生を見つめ直す

世帯	氏名	年齢	性別	居住期間	職業
一人世帯	Hさん	20代後半	女	約1年	アルバイト
夫婦世帯	Iさん	36歳	男	約2年	自営
夫婦世帯	Jさん	38歳	女	約2年	自営

3-3 若者の中山間地域への移住実態調査の内容

調査は移住者と対面形式で、1.2時間程度の雑談を交えながら行った。期間は2013年11月20日、12月4日、25日、

2014年1月15日の計4回行った。ヒアリング調査では、移住者の移住意思決定プロセスと移住後の生活実態などをヒアリングした。

3-4 分析手法

ヒアリングを分析する際には、まず、メモをした内容を羅列して、同じ内容や発言の強いワードを重点的に確認した。さらに、ヒアリング結果を移住目的別にまとめ、①移住の経緯と準備②生活スタイル③移住後の変化④移住前後の満足度⑤地域に受け入れられるためにする行動⑥定住の意思⑦十和地区という土地柄について感じるものという7つの内容ごとに分類した。

また、④移住前後の満足度については、5 とても満足、4 満足、3 普通、2 不満、1 とても不満の5段階評価で理由とともに聞いた。

4. 結果

4-1 ヒアリング調査の結果

4-1-1 就職・起業

①移住の経緯と準備

本カテゴリーの移住に際しては、いなかパイプの存在が大きく関わっている。田舎への憧れや問題意識などの田舎への興味が移住を決断している一因にもなっている。移住に際する準備に関しては、あまりしなかった人や、数か月間の準備を伴った人がいる。公的支援は個人的に町営住宅やケーブルの補助などの住まいに関することは受けたことがある人がほとんどであり、いなかパイプに宿舎を借りている、または借りていた人がいる。移住する際の不安だったことは、うまく暮らしていけるかと考える人や特にないというように人それぞれであった。

②生活スタイル

一軒家の借家もしくはいなかパイプの宿舎に住んでいる。仕事内容は様々であり、仕事内容にはある程度満足している。また、田舎暮らしも楽しんでできており、十和に暮らすうえで将来の不安はない人もいれば、ある程度ある人もいるが、将来の目標は自給自足や自然を使った事業など田舎ならではのものがほとんどである。

③移住後の変化

移住後の変化は生活スタイル、考え方などが変化したように人それぞれであった。移住前に望んでいた生活はおおむね

達成されていた。

④移住前後の満足度

移住前の満足度はおおむね4の満足度を示していた。移住後も4もしくは5の満足度を示しており、移住後に満足度は下がることはなかった。移住前にも居住地の不満はあったが、移住後も理由は違うものの中山間地域ならではの生活における不便さなどの不満がいくつか見られた。

⑤地域に受け入れられるためにする行動

地域の行事や飲み会などには積極的に参加するようにし、地元住民との触れ合いをしている。十和地域に集落ごとにある組に入りたいと思っている、もしくは入っているがほとんどであり、周囲の人間関係がうまくいっていると感じている者がほとんどである。また、移住者同士で交流も定期的に行っている。地域を活性化させたいかは人によって違う意見が得られた。

⑥定住の意思

定住の意思は、「無条件」や「条件付きであり」の人が3人、定住するかは「あまり考えていない」人が1人であった。

⑦十和地区という土地柄について感じるもの

十和の印象として、人が明るく、生き生きとしており、移住者や外から来た人に対して優しく温かいというものを感じている。十和のような田舎に対する魅力は、人が元気なことの他に、自然が多く、食材など素材が豊富であると思っている。

4-1-2 結婚・同居

①移住の経緯と準備

結婚や同居がきっかけとなっているが、前住地での周囲の人間関係や仕事上のストレスなどの不満を解消させるということも伴っている。移住の準備に関しては、あまりしなかった人や、仕事などの関係で半年間の準備を伴った人がいる。公的支援はほとんど受けておらず、移住後は夫と一軒家の借家や夫の実家に同居している。移住する際の不安だったことは、移住先で生活面や人づきあいがうまくいかか心配などと考えていた。

②生活スタイル

一軒家の借家に夫と住んでいる。普段は子育てや家事などの専業主婦や主婦とアルバイトの両方をしている人がいる。十和に暮らすうえで将来の不安は子育て環境の不十分さを挙

げており、将来の目標は経済的に自立するために自分も働くことや、子供を産み家族を増やしたいと考えている。

③移住後の変化

移住後の変化は生活スタイル、考え方などが変化したように人それぞれであった。移住前に望んでいた生活はおおむね達成されていた。

④移住前後の満足度

移住前の満足度は人によって違い、移住後は4もしくは5の満足度を示しており、移住後の満足度は上昇傾向にある。移住前に居住地の不満があり、おおむね解消されてはいるが、移住後も理由は違うものの中山間地域ならではの生活における不便さなどの不満がいくつか見られた。

⑤地域に受け入れられるためにする行動

地域の行事などには積極的に参加するようにし、地元住民への挨拶や会話を大事にしている。十和地域にある組に入りたいと思っている、もしくは入っているがほとんどであり、周囲の人間関係がうまくいっていると感じている者がほとんどである。また、移住者同士で交流も行っており、定期的もしくは一度限りで参加している。現在は地域活性化をさせることは考えていない。

⑥定住の意思

定住の意思は、何もなければ移住しないなどの「条件付きであり」の人が2人、定住するかは「あまり考えていない」人が1人であった。

⑦十和地区という土地柄について感じるもの

十和の印象として、人が明るく、移住者や外から来た人に対して優しく温かいというものを感じている。十和のような田舎に対する魅力は、自然が豊かなことや色々と気にかけてくれるように人が優しいなどと感じている。

4-1-3 余暇活動・自分の人生を見つめ直す

①移住の経緯と準備

いなかパイプの存在が移住に大きく関わっている。しかし、根本的には自分の人生を考え直すために積極的に移住を考えていた。移住の準備に関しては、基本的に住居を探すために1~3か月間の準備をしている。公的支援は受けておらず、居住する家が決まるまでは、いなかパイプに宿舍を借りていた。移住する際の不安だったことは、うまく暮らしていけるかと考える人や特にないというように人それぞれであった。

②生活スタイル

一軒家の借家に住んでいる。仕事内容はアルバイトと飲食店経営であり、仕事内容にはある程度満足している。また、暮らしに満足しており、十和に暮らすうえで将来の不安はない人もいれば、十和の過疎化を心配する人もいる。将来の目標は、事業を起こすことや自分の生活を見つめ直すことや収入を増やすことなど様々である。

③移住後の変化

移住後の変化は自然の中で暮らしていることに満足できていることや、気持ちの面でも良くなっている。移住前に望んでいた生活は達成されていた。

④移住前後の満足度

移住前の満足度はおおむね4の満足度を示している。移住後も4もしくは5の満足度を示しており、移住後に満足度は下がることはなかった。移住後は人間関係に関して少し不満がある人がいたが、不満が特にないという人が2人ということで、他の移住目的に比べると、移住後の不満は少ない。

⑤地域に受け入れられるためにする行動

地域の行事や飲み会などには積極的に参加するようにし、地元住民との触れ合いをしている。十和地域にある組に入りたいと思っている、もしくは入っているがほとんどであり、周囲の人間関係がうまくいっていると感じている者がほとんどである。また、移住者同士で食事や仕事の相互協力などの交流も定期的に行っている。地域を活性化させたいという想いは特に持っていなかった。

⑥定住の意思

定住の意思は、「あまり考えていない」が1人、「なし」が2人であるが、今後他に移住したいと思わなければ、3人とも移住する予定はない。

⑦十和地区という土地柄について感じるもの

十和の印象として、社交的であり、移住者や外から来た人などに対して生活面で面倒を見てくれるなど、優しく温かいというものを感じている。十和のような田舎に対する魅力は、人同士の繋がりがあることや、暮らしの全てを自分たちでまかなえる可能性が高いことであると思っている。

4-2 一般化した移住意思決定プロセス

ヒアリング結果の①移住の経緯と準備、④移住前後の満足度などを基に、様々な要因をピックアップし、個別に移住意

思決定プロセスを作成した。その一例が以下の図である。

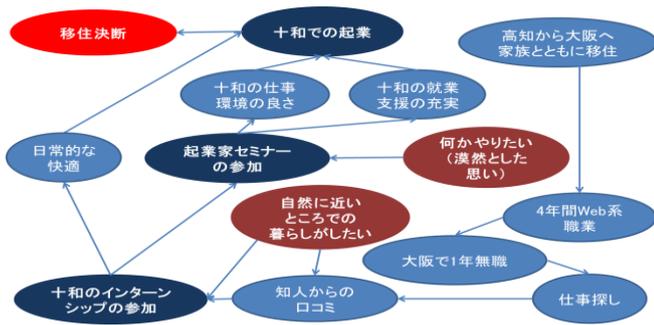


図 4-1 個別の移住意思決定プロセス

そして、さらに個別にまとめた移住意思決定プロセスから移住目的、メリット、デメリット、誘因となる情報源などを基に一般化したものをまとめると以下ようになる。

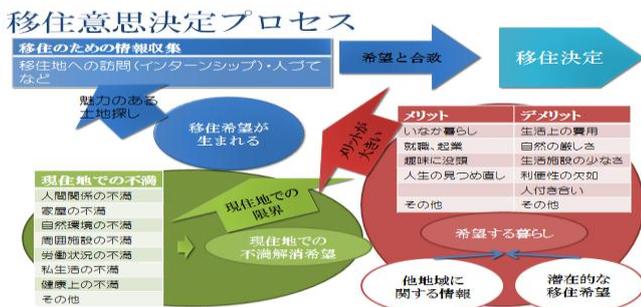


図 4-2 四万十町十和における移住者の一般化した移住意思決定プロセス

移住意思決定には現住地（ここでは移住前に住んでいた土地とする）に不満を感じていたことと様々な理由で違う土地に暮らしたい希望の二つが大きく関わっている。今回の調査で、「就職・起業」、「結婚・同居」、「余暇活動・人生を見つめ直す」を移住目的にした四万十町への移住者は主に、希望する暮らしを求め、移住していることがわかった。ただ、「結婚・同居」を移住目的としている人たちは希望する暮らしと現住地(移住前に住んでいた土地)での不満を解消させたいことが重なって移住していることがわかった。移住希望が生まれてからは、主に、インターンシップに参加し、十和地区のことをよく知ってから移住をしている。

4-3 四万十町における移住者の移住後の実態

今回のヒアリング結果をもとに、四万十町に移住してきた人たちの移住前と移住後での変化や満足度などの生活実態を、①移住前と移住後での変化②移住前後の満足度③地域に受け入れられるためにする行動④定住の意思の 4 つにまとめると以下ようになる。

①移住後の変化

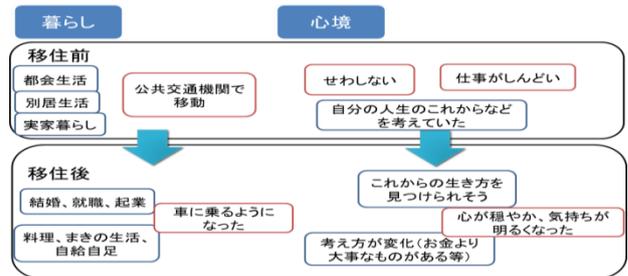


図 4-3 四万十町における移住者の移住前後での変化

移住前後の生活を暮らしの面と心境の面で比較してみた。暮らしの面では、主に都市での生活や配偶者と別居状態から、中山間地域ならではの自給自足的な生活に近づき、別居状態であった人たちは同居するようになった。心境の面では、仕事などが忙しくせわしない生活をしてきたことや都市での生活でこれからの自分の人生を見つめ直していたなどの心境から、心が穏やかになった、考え方が変わった、これからの生き方を見つけられそうなどという心境に変化した。

②移住前後の満足度

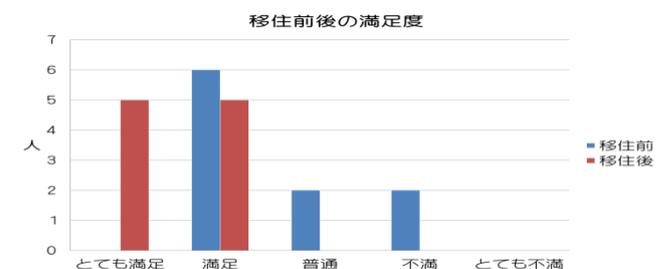


図 4-4 四万十町における移住者の移住前後の満足度

移住前後では移住前の方が満足度は低めに位置し、移住後の満足度の方が高めに位置していることがわかる。個別にみても移住後に満足度が下がることはなく、移住後に満足度が上昇する人が多かった。移住目的別に見ても、同じ結果であった。

③地域に受け入れられるためにする行動

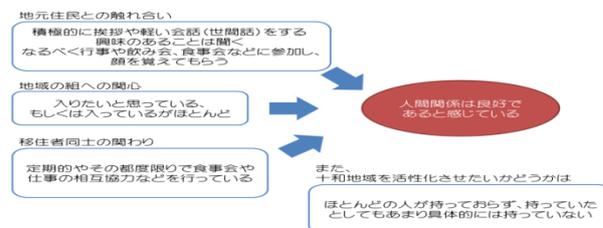


図 4-5 四万十町における移住者が地域に受け入れられるためにする行動

地元住民や移住者同士の関わりには多数の人が積極的な意

向や行動を示しているが、十和地域を活性化させたいかということに対しては、積極的な意見を持つ人は少数であった。

④定住の意思

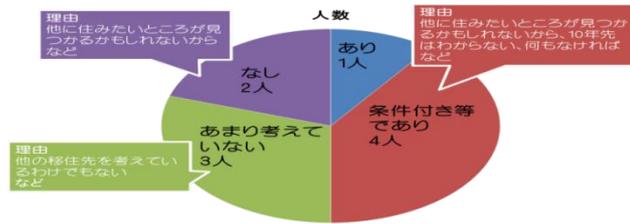


図 4-6 四万十町における移住者の定住の意思

今回ヒアリング調査を行った移住者 10 名のうち「あり」、「条件付きであり」が 5 人であり、半数を占める。「条件付きであり」の 4 人の理由の内訳は、今後他の土地に魅力を感じなければ移住しないという人が 3 人、10 年以上先まで定住するかは考えていないという人が 1 人であった。「あまり考えていない」の 3 人は、定住も他の土地への移住も特に考えておらず、しばらくは十和で暮らす予定である。定住の意思が「なし」の 2 人は、「余暇活動・人生を見つめ直す」の移住目的の人たちであり、他に移住したいと思うところなどが出てきた場合には積極的に移住を考えている。全体的には、他に移住したいと思うところが現れなければ、移住をしないという考えの人が多かった。

4-4 考察

今回のヒアリング結果から、「いなかパイプ」という民間の団体が積極的に移住を促していることが十和への移住に大きく関わっている。これは、田舎へのインターンシップや求人情報など、行政にはあまりないような移住者にとって移住しやすい取り組みをしているからだと考える。そして、ヒアリング結果から、私が着目したのは、「就職・起業」、「余暇活動・人生を見つめ直す」の移住目的の人たちであり、どちらも積極的な移住であるのに、定住の意思に関しては、ありとなしに大きく分かれる。この理由はおそらく、「就職・起業」の人たちは十和でしか叶えられないものがあるため定住を考えていること、「余暇活動・人生を見つめ直す」の人たちはどこでもよかったが、たまたま十和が移住しやすかったただけであり、他に自分の目的を達成できる場所があれば移住してしまうためと考えられる。このことから、移住者に地域を活性化させることを願うためには、「就職・起業」を移住目的としている人々を主なターゲットとし、廃れている産業や活性化させ

たい産業などに積極的にインターンシップや求人などを募集することで、効率よくさらなる移住者を得ることができ、地域も活性化できると考える。

5. まとめ

本研究をまとめると以下の 3 点である。

- ・四万十町の行政、民間を含めての移住政策の豊富さ、特に四万十町のように民間の移住促進団体が就職支援から宿舍まで町内での定住を促進させる取り組みが転入者を増やしている。今回ヒアリング調査を行った移住者 10 名は民間の移住促進団体である「いなかパイプ」のインターンシップなどを通して移住してきたことがわかった。
- ・四万十町十和の移住者の移住意思決定プロセスの特徴がわかり、移住意思決定プロセスは、前住地での不満を解消するための移住を伴うこともあるが、積極的な理由が多いということが明らかになった。
- ・移住後の暮らしを見つめて、生活自体や周囲との関係がうまくいっていることが多く、四万十町十和への移住者の定住に関しては、移住目的の違いによって、定住の意思がない人もいるが、それなりに期待できる意見も得られた。

6. 今後の課題

- ・今回ヒアリング調査の対象者 10 名はすべて民間の移住促進団体である「いなかパイプ」を通して来た移住者なので、今後は四万十町役場の移住政策等を通して来た移住者にもヒアリングを行い、行政と民間の移住政策の効果の違いを比較する必要がある。
- ・中山間地域に若者移住が増えることで、経済やインフラなど、どれくらいの効果が得られるのか検証する必要がある。

参考文献、引用文献、協力者

- [1] 過疎データバンク
- [2] 井口ら 1995 中山間地域における農林業生産と定住促進政策に関する意向調査の分析
- [3] 小森聡 2008 農村地域への定住に係る移住者の意向と受入側の意識に関する研究
- [4] 空閑睦子 2008 わが国における交流・移住政策-交流・移住による地域活性化のための基礎研究-
- [5] 四万十町役場
- [6] 一般社団法人いなかパイプ様
- [7] 道の駅とおわ 刈谷貴泉様